

保護犬を救おう！

3年4組1番 青木つぐみ
3年5組3番 乾佑稀乃
3年5組10番 小林凜音

Keyword: 「殺処分」「保護犬」「保護猫」「ボランティア」

1. はじめに

私たちが保護犬について探究しようと思ったきっかけは、3人とも犬を飼っているので興味があり、保護犬や猫が殺処分されているニュースを見たのがきっかけで殺処分率を下げるためにできることや保健所で保護されている動物の数を減らすために私たちが出来ることがないかを知るためにこのテーマで探究を進めている。そのため私たちは、広報活動や寄付をしようとして活動を始めた。

2. 序論

保護犬には、迷子になり飼い主が分からないわんちゃん、飼い主の家庭環境の変化やさまざまな事情により引き取り依頼・虐待・育児放棄されたわんちゃん、悪質ブリーダーによる遺棄・多頭飼育崩壊の現場から保護されるわんちゃんがいる。犬猫の殺処分頭数は1974年度（昭和49年度）には122万頭（犬115.9万頭、猫6.3万頭）と莫大な数字が出ていた。自治体による譲渡の取組の推進、愛護団体による保護・譲渡活動が大きく発展してきたことから殺処分率が年々減少し、奈良県では令和元年から5年連続で殺処分率は0となっている。このことからもっと譲渡活動などを行えば保護犬自体を0にすることができるのではないのかと思い、どうしたら保護犬が減り殺処分が全国的に減るのかという問いを解決するために、保護犬を救うために考えたことは、「ペットショップの店頭提示を禁止する」「動物福祉政策を強化する」「ペットを飼えるライセンス制度を導入する」「マイクロチップの着用を周知する」「県民の意識を変える」ことである。その中でも自分たちができるボランティア活動の参加や広報活動などを行い、もっと周りに広げていこうと考えた。

3. 本論

1. 譲渡会の結果

今回参加した御所の譲渡会では、20匹ほどの保護犬が新しい飼い主を探すために集まった。会場には、譲渡を希望する家族や個人が訪れ、犬たちとふれあいながら、保護犬に関する情報を得た。最終的に、その日の譲渡会で新しい家族に迎えられた犬は5匹だった。残りの犬たちは、次回の譲渡会や別の機会でも再度譲渡を目指すことになった。譲渡が成立した犬たちは、比較的若くて健康な犬が多く、人懐っこく、初対面の人間にもすぐに馴染めるタイプの犬が多かった。一方、譲渡が成立しなかった犬たちには、高齢犬や病気を抱えている犬、そして過去の虐待経験などから人間に対して恐怖心を持っている犬が多く含まれていた。この結果から、譲渡の成立における犬の健康状態や性格が大きな影響を与えていることが分かった。

2. 結果の分析

まず、譲渡が成立しなかった犬の多くは「高齢犬」や「持病を抱えている犬」だった。こうした犬たちは、飼い主にとって医療費やケアの負担が大きくなることが懸念されるため、譲渡が難しくなる傾向にある。また、人間に対して強い不安感や恐怖心を持っている犬も譲渡が難しいことが分かった。特に、過去に虐待を受けた経験を持つ犬は、なかなか新しい環境に適応できず、譲渡希望者も犬との接触に慎重になってしまう傾向が見られた。さらに、譲渡会では参加者が犬を迎え入れる際に慎重な検討をしていた。特に、子供がいる家庭や高齢者の参加者は、犬の世話や健康管理に対する負担を重視しており、若くて健康な犬を希望する傾向が強かった。そのため、病気や年齢のある犬が避けられる傾向が強まり、譲渡が成立しにくくなるという問題があった。この結果から、保護犬の譲渡を成功させるためには、健康面や性格面での支援が必要であることが分かった。特に、医療費のサポートや、高齢犬に対するケアが必要だ。また、人間に対して不安を持っている犬に対する社会化トレーニングを強化し、彼らが安心して新しい家庭に適応できるようにすることが重要である。

3. 考察

(1) 高齢犬や病気を持つ犬に対する支援の充実

高齢犬や病気を持つ犬は、医療費やケアに対する負担が譲渡希望者にとって大きな懸念材料となる。これを解消するために、保護団体や自治体が医療費の一部を補助する制度や、ケアのサポートを提供することが有効である。例えば、特定の病気に対する治療費を支援するプログラムや、定期的な健康チェックを無料で提供することで、譲渡希望者の負担を軽減することができる。これにより、病気や高齢の犬であっても、安心して新しい家族に迎え入れられる環境が整うと思う。

(2) 人間に対する不安を持つ犬の社会化トレーニング

譲渡が難しい犬の多くは、過去に虐待や放棄を経験しており、人間に対して強い不信感や恐怖心を抱いている。こうした犬たちを新しい家庭に送り出すためには、社会化トレーニングが重要だ。譲渡会の前に、ボランティアや専門のトレーナーが犬たちと定期的に触れ合い、少しずつ人間に対する不安を取り除く取り組みが必要。譲渡希望者が安心して犬と触れ合えるようにすることで、譲渡の成功率を高めることができると思う。

(3) 啓発活動と広報の強化

保護犬に対する誤解や偏見を取り除くための啓発活動も重要だ。多くの人は、保護犬が問題行動を起こしやすい、病気を持っているなどのネガティブなイメージを持っているが、実際にはそうでない犬が多いことを伝える必要がある。保護団体や譲渡会では、成功した譲渡の事例を紹介し、保護犬が新しい家庭でどのように幸せな生活を送っているかを広報することが必要である。また、保護犬を飼うことのメリットや、彼らがどれほど愛情深いパートナーになれるかをアピールすることで、譲渡希望者の関心を引きやすくなる。

(4) 飼い主としての責任意識の向上

譲渡会では、保護犬を迎える際に飼い主としての責任を強調することが大切である。犬を飼うことは一時的な楽しみではなく、長期間にわたって責任を持つべきである。譲渡会では、犬を迎える前に飼い主としての覚悟や準備ができているかを確認するための面談や相談会を設けることが必要である。また、犬を飼う際の基本的な知識や、適切なケア方法についての情報提供を充実させることで、犬と飼い主の双方が幸せな関係を築けるようにする。

4. 結論

今回の研究で動物愛護政策の現状と動物愛護先進国の取り組みを知り、日本が抱える様々な課題や問題を見出すことができたので、今後は動物実験などの問題に向き合い、幅広くたくさんの人に命の重さを理解してもらい共有していきたいと思う。

5. 参考文献・出典

<https://ja.wikipedia.org/wiki/殺処分>

<https://www.city.nara.lg.jp/site/press-release/205245.html>